

【姫路市立白鷺小中学校】の取組

1 テーマ

探究し続ける児童生徒の育成

－主体的・対話的で深い学びの実現に向けた学習過程の工夫－

2 テーマ設定の理由

これからの社会では、「最適解」や「納得解」を、自力で、または多様な他者と協働しながら創出していくことが求められる。本校では、児童生徒に必要な資質・能力として、「探究」を鍵概念とし、目指す子供像を、「探究し続ける児童生徒」とした。その時々課題を、主体的・協働的に解決できる児童生徒を育成していくことが重要であると考え、本テーマを設定した。そして、その手立てとして、以下の二本柱を設定した。1つの柱は、「探究」的な学習過程を取り入れた授業づくりである。もう1つの柱は、「探究し続ける児童生徒」の姿を具現化した資質・能力ベースのカリキュラムづくりである。

3 研究経過

(1) 1年次（平成30年度）の取組

1年次は、「理論」を中心に研究を進めた。新学習指導要領の理念は何か。児童生徒に身に付けさせなければならない資質・能力は何か。校内でも研究推進委員会を中心に、議論を重ね、目指す子供像、授業の在り方を設定していった。

①講師招聘

学習指導要領の改訂を前に、今後、求められる授業づくりの要点を学ぶために、関西福祉大学の加藤明学長や京都大学の石井英真准教授等、多数の講師を招聘した。特に國學院大学の田村学教授には、研究の進捗状況を報告しながら、その都度指導助言を仰いだ。

②研究構造図の作成

図1のように研究構造図を作成した。「児童生徒の実態」「これまでの研究成果」を土台に、「授業改善」を研究の中核に据え、「探究し続ける児童生徒」の育成を目指すものである。

中核となる授業づくりの視点として、①課

題設定の工夫、②課題解決の工夫、③まとめ・振り返りの工夫の3つを設定した。



図1
研究構造図
(平成30年度～)

③「〇〇科における探究」の設定

実践に取り組み始めた当初は、各教科等の授業に「探究」をどのように取り入れていくのか、明確なゴールイメージが共有できなかった。そこで、教科部会ごとに、「探究」を取り入れた授業や単元の在り方を検討した。その結果、例えば、社会科であれば、「公民としての資質・能力の基礎の育成を目指し、児童生徒が学習問題（課題）に主体的に臨み、社会的な見方・考え方を働かせながら資料や他者と対話して得た情報をもとに解決し、次の学びにつなぐプロセス」とする等、それぞれの教科の特性を踏まえた型を設定することができた。

④ブランドカリキュラムの作成

「探究し続ける児童生徒」とは、どのような資質・能力を身に付けた児童生徒なのか、それを具体化したものがブランドカリキュラムである。「探究」を通して育成を目指す資質・能力を表1のように3つの観点と11の能力に整理・分類した。また、それぞれの資質・能力を前期（1～4年）・中期（5～7年）・後期（8・9年）の3期に分け、発達段階に応じて系統的に設定した。

表1 「探究」を通して育成を目指す資質・能力

知識・技能	
思考・判断・表現	○課題設定 ○情報収集 ○整理・分析 ○まとめ・表現
主体的に学習に取り組む態度	○主体性 ○協働性 ○自己理解 ○他者理解 ○社会参画

以下、課題設定を例示する。

前期：自分の関心から課題を設定し、解決方法を考えて追究している。

中期：地域の人々等の思いをふまえて課題を設定し、解決方法や手順を考え、見通しを持って追究している。

後期：自分たちを取り巻く社会に広く目を向けて、活動の意図や目的を明確にして課題を見出している。

課題を設定する際、前期では「自分の関心」、中期では「地域の人々等の思い」、後期では「自分たちを取り巻く社会」を拠りどころとする等、視点を「自分」→「地域」→「社会」へと広げていくことを目指している。

このようにブランドカリキュラムを作成したことにより、9年間で身に付ける資質・能力を可視化できた。

(2) 2年次（令和元年度）の取組

2年次は、「実践」を中心に研究を進めた。「探究」を取り入れた授業や単元の在り方について、教科部会を中心に、実践を通して、知見を蓄積していった。また、教科部会間の情報共有を図るために、研修だよりを発行し、それぞれの研究授業についての成果と課題を明らかにした。

①一人一研究授業の実施

全教職員が1年間に1度以上、研究授業を実施した。全員がいずれかの教科部会に所属し、部会単位で学習指導案検討、研究授業を行った。実践を通して、前年度に設定した「○○科における探究」に修正・改善を加えた。以下、研究の視点ごとに実践例を記載する。

研究の視点①課題設定の工夫

○8年国語科「鰹節～世界に誇る伝統食」

最初に、鰹節を知らない人に鰹節を紹介する文章を書かせた。生徒は、この活動を通して、表現の難しさを実感した。その上で、教科書の文章を読み、表現の秀逸さに気付いた。まさに、困り感が課題を引き立たせたと言える。

○7年英語科「環境ポスターを作ろう」

英語科では主に単元を貫く課題設定に取り組んだ。単元の始めに、単元終盤で求めるゴールイメージを提示し、そのために知識・技能を習得する必然性をもたせて学習に取り組んだ。単元を通じた、「探究」が有効であった。

研究の視点②課題解決の工夫

○2年図工科「ざいりょうから ひらめき」

布等を思い通りの形に固めることのできる液体粘土を使用した。児童は、自分のイメージ通りに形を作ることができ、次から次へとアイデアを形にしながら自分だけの宝島を作っていた。児童は「教材の魅力」に触れながら、制作活動に没入していた。



写真1 制作活動に取り組む児童

○8年社会科「自然環境の特色」

地形図や雨温図、写真資料や気象データ等を手がかりに、都道府県を特定していった。正解は、長野県であるが、既習知識である「コウノトリ＝兵庫県」の資料をノイズとして入れることにより、生徒の思考は揺さぶられた。「環境条件や他地域との結び付きなどを関連付ける」という社会科の見方・考え方を働かせた課題解決であった。

①一人一探究の推進

1年次の学校全体での「探究」、2年次の部会単位での「探究」を受け、3年次は、個人が日頃の授業をいかに「探究」的なものにしていけるかに挑んだ。そのために個々の「探究テーマ」を設定し、年間を通じて取り組んだ。

②校内研修会

10月13日には、田村教授を招聘し、午前中には小学部3本、中学部3本の授業を参観していただいた。午後は、全教職員参観の下、6年社会科「戦国の世の統一」の提案授業を公開し、事後検討会も実施した。また、「探究し続ける児童生徒を育成するために」というテーマで、パネルディスカッションも行った。提案授業と事後検討会、パネルディスカッションの様子は、インターネットで他校へ配信した。

③探究下敷きの作成

児童生徒が日頃の授業や生活の中でも、「探究」していけるように、手元にその手がかりとなるものを置かせたいと考え、「探究下敷き」を作成した。ジュニア版（1～4年生）、ミドル版（5～7年生）、シニア版（8・9年生）の3種類を作成した（写真4）。ジュニア版では“自分の好きなもの・こと”を起点に、ミドル版では自分の生活をよりよくしていくことから、「探究」へと進んでいくような構成にした。シニア版では地域貢献や自己実現を目指して、「探究」していけるようにした。また、問いの立て方や思考ツール、表現方法の例等も紹介したり、紙幅の都合で掲載できなかった内容についてはQRコードを読み取ってアクセスできるようにしたりした。



④グランドデザインの策定

写真4

図4は、本校のグランドデザインである。

2年次までは、主に「授業研究」を中心に「探究」を進めたが、3年次からは、「特別活動」や「生徒・生活指導」、「学級経営」においても、「探究」の考え方を取り入れ、学校全体で「探究し続ける児童生徒の育成」に取り組む体制へと発展させた。



図4 令和2年度グランドデザイン

4 3年間の研究を終えて

(1) 成果

今回の研究を通して、我々には、どうしても拭い去れないジレンマがあった。それは、児童生徒主体の授業では、「教師は教えるはいけないのか」ということである。残念ながら、その問いに対する明快な答えは持ち合わせていない。ただ、研究により我々が得た知見は、教師が教えるか教えないかという議論よりも、児童生徒が教材の魅力に触れ、「学ぶことが好き」という思いを持たせることが、「探究」に向かう上で、最大の原動力になるという手応えである。

そのためには、授業や単元の中で、児童生徒がそれぞれの教科の見方・考え方に触れたり、それらを働かせたりして、その教科の魅力が感じられるようにしていく必要がある。本校の強みは、小中教職員が同

じ職場に集っていることである。その強みを生かしながら、それぞれの教科部会がよりよい授業づくりを進めていきたい。

また、研究課題とは直接の関わりはないが、年間を通して、教科部会内で小中教職員が協働できたことは、一体感を高める契機となり、同僚性を構築するという副産物も得ることができた。

(2) 課題

1点目は、生活科・総合的な学習の系統的なカリキュラムづくりである。1～9年生の生活科・総合的な学習の内容を整理するとともに、ブランドカリキュラムに即し、それぞれの単元において身に付けたい資質・能力を明確にしていくことが求められる。

2点目は、学力保障の視点である。「探究」を進める一方、その下支えとなる「知識・技能」の習得が喫緊の課題である。基本的な「知識・技能」をもった児童生徒が、それらを総動員して、「思考・判断・表現」しながら、自己実現や社会貢献に寄与していく社会人へと成長してくれることこそが、本校の目指す「探究し続ける児童生徒」のゴールであると考えている。

5 参考文献

- ・田村学 「深い学び」
東洋館出版社 2018年
- ・石井英真 「未来の学校」
日本標準 2020年